
WILDCAT

龍桜姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WILD CAT

【Nコード】

N1102Z

【作者名】

龍桜姫

【あらすじ】

とある街へヴンズ・ウェイ、その街の外周に位置するアウター・ヘブンで暮らす金さえ払えばだいたいのことはやる便利屋の女性が主人公。

へヴンズ・ウェイとアウター・ヘブンで活躍する娯楽アクション＆猫を成分とする物語。

野良猫（前書き）

殺人などの非合法なことや訳の分からないノリと勢い、猫に娯楽といったものが苦手な方はご遠慮下さい。

野良猫

小説や漫画のように目が覚めたら異世界だったなんてことはなく、ただいつもの天井が目の前に広がっているだけ。

部屋の床には、服や下着が散乱していた。

もちろん、片付けをしようと思ったことは幾度もあったがそんな時に限って、携帯がけたたましく仕事の到来を告げ、邪魔をしてくれる。

よって片付かない。友人にも、いいかげん片付けると何度も言われそのたびに片付けようと思うのだが、携帯がなる、仕事、片付かない。

このループが続いている。

「・・・なんか気だる」

私は、ラッキー・ストライク煙草を一本取り出す^{ラッキー・ストライク}が火をつけるのをやめた。体がべとついて気持ち悪く吸う気になれない。

とりあえずシャワーを浴びることにした。風呂にも入ろうと思ったが、浴槽に湯を貯めるのが面倒でやめた。

全身を熱い湯が心地いい刺激と共に体のべと付きを洗い流し、いつものクリアな状態にする。

シャワーを浴びたあとは下着を身に付けず軽く体を拭いたあとバス

タオルを肩にかけ、部屋にある冷蔵庫からミルクのビンを取り出した。

いいかげん、二十歳すぎたのにミルクかよとよく友人に言われる。まったく自分は、これが好きなんだほつといてくれ。

世の中には酒が好きな奴が居るがあれのどこがいいんだか？

私は、窓を開け部屋に風を入れる。そして、腰に手を当てミルクを
一気飲み。

「ぶっはー」

これを友人の前でやると親父かとツッコまれるが、出るんだから仕方がない。

さつき火をつけるのをやめたラッキーストライクとジッポライターを取って、改めて火をつける。

窓の淵に手を付きながら外を見る。空は、快晴、時折鳥たちが楽しそうに空を舞い、風が心地よい。

昨日の仕事が厄介なもので、長引いた拳闘家に帰ってきたのが明け方だった。

帰ってくるなりそのままベットにダイブ、で起きれば昼であり現在である。

右手にはアウター・ヘヴンの街が一望でき、左手にはヘヴンズ・ウェイの街が分厚い鉄の壁に邪魔されて見えるはずなんだが見えない。

そんな私の世界を眺めていると

「にゃー」

と一鳴き猫の声が横からした。

声の方向を向くと家の窓の淵に器用に座ってここが自分の定位置だ、早くミルクをよこせと言わんばかりに私が置いていたミルクビンを軽く猫パンチ。

しょうがないのでミルクをもう一本冷蔵庫から出して小皿に移し猫の元へ置くと、すぐにミルクを飲み始めた。

ここで煙草をもう一本。

「お前は、気楽でいいよな」

そう言っつて猫に微笑みかけると猫は、顔を上げ

「それでもねえですよ姐さん。こっちにだつてネコの社会つてのがあるんですぜ」

そう言っつてすぐにミルクをまた飲み始める煙草を思わず窓の外に落としてしまう。この家はかなり高い位置にあるのだが下に人がいようが今はどうだっていい。

疲れてるんだもう一眠りしよう。すぐにベットにもぐりこんで、目を閉じるとすぐに深い闇に意識が沈んでゆく。

再び覚醒するとすでに夕方。猫もいなくなっており、黄昏の夕日
が目にしみる。冷蔵庫から三本目のミルクを取り出して、戻ってく
るとテーブルの上に一枚の紙が置いてあることに気づく。

その紙に書いてあったものみて愕然とする。紙には丁寧にお礼が書
いてあった。しかも、筆で。そして、文末に見事な猫の手マークが
押してありにゃん太とご丁寧の名前まで書いてあった。

ここで本日三本目の煙草を取り出しジッポライターで火をつける。
窓から夕日を眺めながら、煙を吐くと同時に溜息をひとつ。

「なんなんだ」

と肩を落としひとりごちる。すると、携帯の着信ゴッドファーザー
愛のテーマがなった。

電話を取ると相手は、いつもの仲介人で急ぎの仕事が入ったからす
ぐにやってくれとのことだ。

「ちょうどいい」

私は、一服した後椅子の上にかけてあったジャケットと床に散らば
った下着やいつもの黒いシャツとホットパンツをとって身にまとい、
相棒のベレッタP×4二丁の弾倉を確認して、腰のホルスターにし
まっ。

玄関口で自分の部屋の状態を見る。今日も部屋の片づけができなかつたな、まあいい。

私は、ワルド・キヤット野良猫。名前はまだない。

さあ仕事の時間だ。シヨウタイム

私は、家を出て天国の外側と天国への道アウターヘヴンを猫のように自由気ままにヘヴンズ・ウェイ暴れまわるのだった。

. . . t o b e c o n t i n u e d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1102z/>

WILDCAT

2011年12月4日01時48分発行